

仙台二高創立109周年 創立記念日 記念講演

日 時 平成21年 5月 1日 (金) 1:15～
会 場 二高講堂
講 師 仙台二中42回卒 順天堂大学名誉教授 和賀井敏夫 先生
演 題 「創意無限～超音波診断研究50年を回顧して～」

和賀井敏夫 先生 略歴

大正13年9月21日 宮城県桃生郡石巻町出生
昭和12年4月 (旧制) 宮城県仙台第二中学校入学
昭和20年3月 (旧制) 第二高等学校理科卒業
昭和24年3月 (旧制) 新潟医科大学医学部卒業
昭和28年11月 順天堂医科大学助手 (外科学)
昭和45年1月 順天堂大学教授 (超音波医学研究施設長)
平成2年3月 順天堂大学定年退職、名誉教授

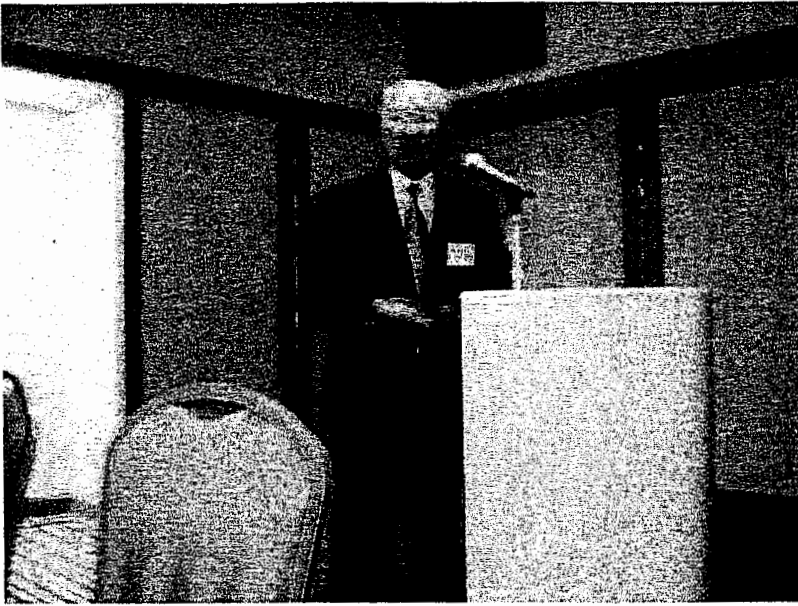
主な団体学会関係略歴

昭和51年8月 世界超音波医学会初代会長(現名誉会長)
昭和57年4月 日本超音波医学会会長(現名誉会員)
昭和58年6月 国際乳癌超音波診断会議会長(現名誉会長)
昭和60年11月 アジア超音波医学会初代会長(現名誉会長)
昭和63年7月 日本学術会議会員

その他米国、英国、フランス、ベルギー、オランダ、オーストリア、ユーゴスラビア
オーストラリア、ブラジル、中国、韓国、台湾など各国超音波医学会の名誉会員

主な受賞関係

昭和51年1月 朝日賞(超音波診断法創始)
昭和61年4月 紫綬褒章(超音波医学研究)
昭和61年11月 石巻市民特別功労賞(超音波医学研究)
平成7年4月 勳三等瑞宝章
平成18年7月 日本学士院賞(超音波診断法創始発展)
平成20年4月 石巻市名誉市民賞



【参考】日本人によるエコー検査の実用化（「メディカルα」第31回放映より）

和賀井敏夫は、脳腫瘍の研究に没頭していました。

当時、今から50年以上も前、脳腫瘍の検査で主流だったのは、脳に空気を入れ、X線撮影をする方法です。しかし、この方法では空気を入れる際、患者が激しい痛みを感じる上に大きな腫瘍しか映すことが出来ませんでした。そのため、脳腫瘍と分かった時には手遅れの場合が多く、10人に1人の命しか救えなかったのです。医療技術の限界を前に、意気消沈するしかない和賀井。しかしここで転機が訪れます。

彼はある時、故郷・宮城の港で、損傷を受けた船を検査している現場に出会います。それは船体の外から超音波を使い、内側にある故障箇所を発見していたのです。その様子を目にした和賀井は思いました。

「この方法を脳腫瘍の発見にも使えないだろうか？」

和賀井は当時、潜水艦用の超音波装置を作っていた日本無線にこんな話を持ちかけます。

「これまで、軍事用にしか使われていなかった超音波を、是非、医療用に開発してもらえないだろうか。」

日本無線の技術総責任者・中島茂は和賀井の申し出を快く引き受けてくれました。そしてすぐ様、2人は脳の標本に超音波を当てる実験に乗り出しました。すると、脳の超音波の波形が見事に映し出されたのです！この結果を受け、和賀井は実際に脳腫瘍の疑いがある患者の脳に超音波を当ててみると・・・今度は脳腫瘍特有のパターンを発見、すぐに緊急手術を行い、患者の一命を取り留めるのに成功します！この結果を元に、和賀井はさらに研究を続けます。

「脳腫瘍の発見には成功した。では今度は、止まることなく動き続ける心臓のその動きをとらえることはできないだろうか？」

和賀井の熱意に、中島は協力を惜しまず、自宅を担保にしてまで多額の開発費を捻出。新しい超音波検査装置の開発に取り掛かります。そして1974年4月。

和賀井が最初に提案をしてから、実に24年もの長い歳月を経て、ついに超音波エコー診断機が完成。心臓の状態を、画面にクッキリと映し出す事に成功しました！こうして、医者と技術者、畑違いの2人が手を取り合い、新たに作り出したエコーはそれ以降、多くの人々の命を救う事になるのです。